



日本による再占領期中の青島における音楽活動(1938年～1945年)

李, 雅心

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 15(1):1-9

(Issue Date)

2021-09-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012986>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012986>



日本による再占領期中の青島における音楽活動(1938年～1945年)

The Music Activities in Qingdao during the Re-occupation Period by Japan (1938-1945)

李 雅心

Yaxin LI

要約：本研究では第二次世界大戦時、日本による再占領期(1938年～1945年)中の中国青島での音楽文化の諸相と特徴について考察した。青島の音楽文化は、日本の植民地及び返還期を経た後、西洋音楽と日本音楽及び中国の伝統音楽が共存した特徴がある。当時の日本が「大東亜共栄圏」の構想に基づいて、「武力による支配よりは文化による支配」という文化戦略を取っていたため、青島における音楽活動は、戦時中にもかかわらず、中断されることはなかった。本論文の目的は、当時の日中両国の公文書、雑誌、新聞紙、プログラムなどの一次史料に残された情報に基づき、日本本国の影響の下に展開された青島における音楽活動について考察し、当時の青島における音楽活動の特徴を捉えることである。また、現在の青島におけるマルチカルチャーな音楽活動の特徴との連続性も明らかにする。

キーワード：青島 音楽活動 日本 植民地 占領期

1. はじめに

1.1. 青島の被占領時代

青島はドイツ占領期(1897～1914)、第一次日本占領期(1914～1922)、国民政府期(1922～1938)を経て、1938年1月に再び日本に占領された¹。その植民地・占領地としての長い期間における青島の音楽文化史は、近代中国の地域史としての音楽文化の歴史という側面とともに、ドイツ(ヨーロッパ)音楽の展開の歴史としても捉えられる。さらに、日本の占領とその支配政策は、青島の音楽文化に、より複雑な様相を与えた。青島の植民地支配に関しては、ドイツによる「模範植民都市²」構想と日本による「大東亜共栄圏」構想が存在したが、いずれも社会学者のロビン・コーエンによる「帝国ディアスポラ」理論³で理解できる。両国は植民地青島で、それぞれの「帝国ディアスポラ」計画を実施していたのである。

1.2. 武化から文化へ —日本の文化戦略—

1914年の青島攻略戦と異なり、第二次占領の際には、日本軍による攻撃はなかった⁴。軍事力による破壊を免れたことは、青島の各方面の事業が停滞なく発展してきた要因の一つであった。

当時、青島の現地の日本語雑誌『山東文化』の1944年8月号に掲載された「第三回決戦文化協議会記」と題する文章には、以下のような記述があった。

「文化は兵器なり、在華北文化団体の総力を結集して大陸における銃後戦線に挺身せよと、去る昭和十八年四月北京における華北連合文化協議会において結成を決議された。本協議会即ち決戦文化華北連合協議会は、同年十一月天津における第二回協議会において、いよいよ運動方針を明確にすると共に、その運動主体団体として在華日本文化協会を結成し事務局を北京に置くこととなったのである……」(『第三回決戦文化協議会記』『山東文化』1944年)

1942年6月号の日本の音楽雑誌『音楽の友』にも以下のような記述があった。

「武化の後に文化が来る—ここに大東亜共栄圏の確立の文化的使命が顕著に認識されてくる。時間的に見れば、武化が先にして文化が後となり、空間的に見れば、文化が主で武化が従となる。武が破壊とすれば、文は建設であり、武化が動的とすれば、文化は静的である。しかも、これはその間決して対立する二つのものではなくして、一本一糸のものと見られる。」(石井文雄「大東亜共栄圏と音楽対策」『音楽の友』1942年)

以上の史料からみれば、日本の占領地政策では、「武力による支配よりは文化による支配」が強調されていたことが分かる。この観点は石井文雄の以下の記述からも考察できる。

「大東亜新秩序建設の本質を考えると、東亜共栄圏確立は文化の新建設が必要となっている。音楽もそうした運命のもとに再吟味と新建設が招来されてこなければならぬ。」(石井文雄「音楽に於ける新東洋主義」『音楽之友』第2巻第10号 1942年)

また当時、大東亜共栄圏の文化側面については以下のような記述があった。

「大東亜共栄圏内に於ける文化政策としては何處までも圏内諸国家並に諸民族の宗教、風俗、伝統其他の生活様式を尊重し、彼等の日常生活に急激な変化を来さないやうに留意し、然も其の宗教、風俗、伝統の踏襲は飽くまでも主体国家の指導に信従する限りに於て之許すべしと云ふのである。」(小野武夫『佐藤信淵』p.260 第二篇 現代に生くる信淵の思想：第三章 大東亜共栄圏の文化指導理念 東京潮文閣 1943年を参照)

「特殊的な差別性を一切没却して各特殊の個性を超えた一律的な観念としての共通性を意味してはならない。」(同書 p.250)

すなわち、当時、大東亜共栄圏内の日本の文化政策は異質的民族要素を統一することではなく、異質を保留し、その上に共通性を持たせるという方針であった。

一方、上記の石井論文に使用された「大東亜共栄圏」概念は、以下のように、日本占領下の上海における音楽の先行研究にも使われている。

「この時期(1942年～1945年)の日本主宰の音楽連盟は——参加者にはドイツ人、オーストリア人、イタリア人、ロシア人、各国から来たユダヤ人と一部の中国人音楽家を含む——音楽活動を通じて『大東亜共栄圏』の使命を達成するという日本人の構想には有益なものであった。」(湯亜汀「帝国流散, 世界主義的城市空間と上海西方音楽史: 日本音楽家と上海音楽協会交響楽団(1942—1945) 个案研究」『音楽芸術』2013年)

近代の上海は、各国からの亡命音楽家が集まる土地となり、アジアにおけるクラシック音楽活動の中心地になったといえる。当時、アジア人音楽家が上海で活動することで、国際的な評価を獲得することもできたのである。

「亡命者にとって上海は一九世紀半ばより西洋文化が根づいた土地であり、特に音楽家やバレエ・ダンサーにとっては劇場、ダンスホール、大小さまざまなカフェ、レストランなどの活躍の場、生計の手段をもとめうる避難地であった……」(井口淳子『亡命者たちの上海楽壇』音楽之友社 2019年 p.5)

作曲家の服部良一は以下のように語っている。

「上海は知名度と地位を意味する。多数の音楽家一朝比奈隆を

含む一が上海を世界舞台への起点と見なす。」(湯亜汀、前掲書)

同時期の青島も、また上海と似た様相を呈していた。すなわち、青島はドイツ占領期においてヨーロッパの音楽文化に深く影響され、国民政府期においては、安定的な発展と文化および教育の重要視・国立山東大学の再建などの「文化教育システムの整備⁵⁾」が遂げられたのである。このような背景の下、青島は当時の中国東部沿海地域の中でクラシック音楽受容の代表的な都市となり、上海の音楽活動とも多様なつながりを持っていた。

それゆえに、引用した史料からも、当時の日本は、上海と青島の両方を中国東部沿海のクラシック音楽の中心地と認識し、音楽活動を通じて「大東亜共栄圏」を実施させる対象としたことがわかる。この活動は、台湾で推進していた「皇民化教育」政策(1937—1945)の側面もあったと理解できる。

「皇民化教育」は「1937年から1945年まで日本政府が台湾人の民族意識、伝統文化および風習を無くすために強引に台湾で行った活動」である。(佟建寅 施菊英 謝安邦『台湾历史辞典』群衆出版社 1990年)

具体的には、日本語を国語とし、中国名字から日本名字への改名、学校で天皇を尊敬することと忠君愛国(日本)の思想を教育するなどの政策であった⁶⁾。一方、当時の植民者の日本は、上海と青島の植民地の音楽伝統などを尊重しながら、音楽活動を利用し日本文化浸透の政策を推進していた。これは、台湾での「皇民化教育」ほど強引的ではないが、最終目的は「皇民化教育」と同じく、植民地の人々を日本の支配の下で同化していき、「大東亜共栄圏」の構想を実現させるためであると考えられる。

1.3. 研究目的

戦時期の影響もあり、第二次日本占領期の青島における音楽活動に関する史料は少なく、そのほとんどが断片的な記述である。それ故に、先行研究もほぼ存在しない。そこで本論文の目的は、当時の日中両国の公文書、雑誌、新聞紙、プログラムなどの一次史料に残された情報に基づき、日本本国の影響の下に展開された青島における音楽活動について考察し、当時の青島における音楽活動の特徴を捉えることである。また、現在の青島におけるマルチカルチャーな音楽活動の特徴との連続性も明らかにする。そのため、当時の青島に生きた現地の日本人、その他の外国人、および現地の中国人などの視点から、複眼的に考察する。

2. 日本主導の音楽活動の展開

2.1. 藤原義江などの日本音楽家・音楽団体の青島訪問

第二次日本占領期においても、日中の文化交流活動は活発に行われていた。1939年4月9日の『青島新民報⁷⁾』には「慰問音楽班の青島定期公演」という記事があり、その様子について、以下のように記述している。

「大阪東京朝日新聞社主催の皇軍慰問音楽班は、本月十三日

東航の大連丸で上海から来青する。その一行の藤原義江氏などは日本音楽界第一流の人物である。十六日まで青島滞在の予定で、陸海将兵慰問のほか、十四日、十五日の二日間に軍人以外の日本人重要人物並びに中国方面各機関代表者のためにも公演する。日本味の豊かな歌詞を紹介し、以て芸術親善の一助とする」（「慰問音楽班定期来青将做公开表演」『青島新民報』1939年4月9日）

この記事には、注意すべき点がある。

第一に、「定期来青」はこの慰問活動が計画的・長期的に行われたことを示唆する。

第二に、その青島訪問は、日本軍慰勞のほか、日本・中国双方の要員のためにも公開の音楽会を開催していたこと。

第三に、曲目の選定基準は「日本味の豊かな歌詞を紹介し、以て芸術親善の一助とする。」とあったことである。

記事の内容から、日本人音楽家を本国から青島に派遣し、日本軍を慰問すると同時に、「公演」の形で青島市民に日本の音楽を紹介したことが明らかであり、そのことは結果的に市民の音楽生活を豊かにし、異文化交流の場を提供したこともなっていた。なお、「定期公演」という形は、日本政府が明確な目的と計画の下に青島市民との交流を図り、青島に日本文化を発信することで、占領地の日本化を推進しようとしたことを示唆している。

上記の中国での報道と同時期に、日本の『朝日新聞』にも以下のような二回の関連記事が報道された。

〔大阪電話〕大阪朝日新聞社会事業団では在支皇軍将兵慰問と日支文化提携親善の音楽使節としてテナー藤原義江、ピアノ伴奏者加納和夫両氏を派遣することになった。両氏は四月六日長崎を出発、上海、南京、青島、天津、北京各市で慰問、親善の独唱会を開催する。（「テナー藤原渡支」『朝日新聞』朝刊1939年3月30日）

〔下関電話〕太陽熱と砂塵に両眼を犯されながらも上海を振出しに南京、済南、青島、天津、北京と三週間の歌行脚を続け、皇軍将士慰問の使命を果たした本社社会事業団派遣の藤原義江、伴奏加納和夫両氏は二十二日朝下関入港の関釜連絡船で帰来、同九時二十五分発列車で藤原氏は東京へ向かった。（「藤原義江氏帰る」『朝日新聞』夕刊1939年4月23日）

上記の日本側の記事からは、藤原義江らが音楽使節として中国に派遣され、占領地での日本軍慰問と芸術親善の二つの役割を兼ねていることが分かる。

また、1944年9月11日の『青島大新民報』は「日華親善音乐会今在国际剧场揭幕」（「日華親善音乐会は本日国際劇場にて開催」という記事を掲載し、その様子を「華北演芸協会は日華親善を促進するために、興亜新報社及び本社の後援の下、本日十一日及び明日十二日に国際劇場にて日華親善音乐会を開催する。演出者は友邦の高名な音楽家藤原義江、斎田愛子、高木東六などである……」と記述した。

同紙は1944年9月13日に、再びこの音楽会の記事を掲載した。

その内容によれば、藤原義江、斎田愛子と高木東六などは青島に到着後各方面を訪問し、軍を訪問する際には「名歌を歌唱し、以て兵士の心を慰問した。」「日華親善音乐会国際劇場公演初日、満席の会場が藤原、斎田二氏の歌唱と高木のピアノ演奏に驚嘆し、希代のバリトンである藤原（藤原はテノールである——筆者）は満場の喝采を博した⁹。」

この訪問は藤原義江の二度目の青島訪問であった。日本で高名な芸術家であった藤原が二度も青島へ派遣されたことは、青島で日本文化を浸透させるという日本政府の強い意図がうかがえる。

藤原などの青島訪問のほかに、1941年12月7日の『青島新民報』にも東京の音楽団体の青島公演の記事が存在する。著名な音楽家と音楽団体による出演は、現地青島の人々の音楽生活を豊かにした一面もあった。特にドイツ占領期を経てクラシック音楽に馴染むようになった青島の人々にとっては、高いレベルのクラシック音楽は、市民の審美的な傾向とその要求に合致するものであった。

なお、同じ時期の『上海猶太早報』（1943年10月16日）も藤原、斎田と高木の上海公演の記事を掲載し、その様子について「一九四三年一〇月十一日、日本声楽家藤原義江（世界的なテノール）、斎田愛子（メゾソプラノ）の二名が東京から上海を訪問し、美琪大劇院で出演した。主催者は上海音楽協会（中略）、ピアノ伴奏者は高木東六」と記述している。

上記より、日本の音楽家が日中戦争期の日本の占領地、特に音楽に馴染んでいた上海と青島で活発に活動していたことが明らかであり、西洋音楽を媒介にして日本本国と占領地との文化的なつながりを緊密にさせようとした日本政府の意図がうかがえる。

2.2. 現地の日本軍による軍楽演奏活動

当時、青島駐在の日本軍は頻繁に無料の公開演奏を行い、現地の市民の参加も歓迎された。例えば、「一九四〇年一〇月四日、日陸軍音楽会が第三公園で開催し、青島放送局もその軍楽をラジオ放送した¹⁰。」「一九四三年三月二四日、日本海軍楽隊が青島の四方、滄口などの地で演奏を行った。日本海軍の松島参謀長は演出時に講話をし、中国音楽は古来より六芸¹¹の一つであり、日本の音楽より遥かに勝る¹²。」といったような報告をしている。

また、1942年5月26日の青島市特別公署¹³の公文書にも、以下のように、華北日本陸軍音楽大会に関する記録があった。

「演奏期間：1942年5月27日～5月29日

演奏場所：当時青島市上海路の陸軍クラブ¹⁴と膠州で行う予定。音楽大会の主旨：第四回治安強化運動¹⁵の展開以降、中日官民が同心協力を推進している。本市市民を慰め、且つ激励するために、日本陸軍楽隊が演奏大会を定期的に行う。本署は協賛しながら、この機会を利用して市民に対し第四回治安強化運動の意義を宣伝し、市民の意識を高める。（「華北日本陸軍音楽大会演奏方案」青島市特別公署1942年5月26日より抜粋・引用）

上記の公文書から、以下の点が考えられる。

① 日本陸軍楽隊の音楽大会は、計画的・長期的に開催されていた。

② 軍楽隊の音楽大会において、市民への治安強化運動の意義が宣伝されていたことから、この大会には、音楽活動を利用した支配強化という明確な目的があったことがわかる。

以上のように、一部の軍楽の公開演奏は文化交流を重視する普通の音楽活動とは異なり、占領地への軍事支配を促進する媒介となったと推測できる。

3. 青島の学校音楽活動及び地元楽団の音楽活動

3.1. 学校での音楽

ドイツ占領期を経て、青島の学校での音楽教育はクラシック音楽の強い影響を受けるようになった。政治的に考えれば、このようなドイツの音楽教育の浸透は、音楽による植民であり、ドイツ文化の侵入でもある。しかし一方で、クラシック音楽はその科学性と先進性において参照すべきものであることは否定できなかった。この側面で見れば、ドイツ占領期の音楽教育の施行は、クラシック音楽普及の有益な促進力として、青島の音楽文化の発展史において特筆すべきものでもあった。以降、青島の音楽教育には、「クラシック音楽と伝統音楽の両者併行」という特徴が現れた。このように発展してきた青島の学校音楽教育は、その後の日本占領期、国民政府期を経て再び日本占領期に入り、戦時期の社会環境を反映した。

3.1.1. クラシック音楽教育の代表——聖功女子中学校

私立聖功女子中学校（現在の山東省青島第七中学）は、1931年にドイツ人宣教師 Bischof Georg Weig (S.V.D.¹⁶) を発起人とし、アメリカウイスコンシン州聖フランシスコ教会により設立された教会学校であり、その「クラシック音楽の教育」という特色は、当時の青島では有名であった。その後、第二次日本占領期に日本側の指令により、聖功女子中学校は教会を離脱し、新たに日本語の授業を設け、日本教育を実施するようになった¹⁷。同校の音楽活動の記事は、新聞に頻繁に掲載されていた。例えば、市礼堂で音楽演奏会の開催（『青島新民報』1940年10月12日）、青島新民歌唱大会でのピアノ独奏（『青島新民報』1940年7月1日）、ラジオ局に招待され、「庆祝孔子誕辰紀念典礼」（孔子生誕紀念式典）で合唱「黒的催眠歌」（「子守歌」を意味する——筆者）とバイオリン合奏「大音楽会的瓦茲舞」（「華麗なる大ワルツ」——筆者）を披露（『青島新民報』1941年10月7日）、音楽演奏大会で三部合唱「ドナウ川のさざなみ」ヨシフ・イヴァノヴィチを披露（『青島大新民報』1943年6月13日）などが存在する。日本占領期にもかかわらず、その演目には日本の作品の記載がなく、クラシック音楽が中心であった。記録を見る限り、聖功女子中学校はクラシック音楽を自らの伝統と位置づけ、青島のクラシック音楽教育を牽引する代表的な存在であった。

3.1.2. 「新民会」主導の学校音楽活動

「新民会」は中国華北地区に駐在する日本軍が設立且つコントロールする民間団体であり、「中華民国新民会」とも呼ばれるが、活動範囲は河北、河南、山東、山西の四省と北京、天津、青島の三都市に限られていた。1937年12月24日に設立され、1945年8月24日に解散された日本の支配に協力する中国人団体であった¹⁸。新民会の目的は以下の通りである。

「（前略）昭和十二年十二月北京に新民会を設立し北支に於ける従来の排日抗日の思想を転換し、日支親善の思想たらしめんとするものであり其の主義とするところは大学の三綱領たる明德、新民、至善による王道を以て立国し東亜永遠の平和を確保せんとするものである……」（佐藤清勝『支那再建の現況』第十章 思想建設：其二 新民会の設立 1941年 pp.154～155）

『青島新民報』、『青島大新民報』などの新聞紙名からも分かるように、「新民会」は青島での影響力が強かった。そのような背景の下、「全民的音楽活動」と呼ばれる市民を巻き込んだ音楽活動も展開された。たとえば、「新民歌唱大会」は1940年6月に青島市区で開催され、「新民歌演奏会」は同年12月に膠州区で開催された。いずれも「新民」をテーマとする音楽活動であった。

1940年7月1日の『青島新民報』と1940年12月27日の『新民日報』が「新民歌唱大会」と「新民歌演奏会」の様子を以下のように記録している。

「本市新民会は音楽水準の向上と新民精神の普及を図るため、6月30日の午前十時に本市平度路光陸大劇場で第一回の新民歌歌唱大会を行った。参加者は本市の小中学生。微雨であったが、入場無料のため、各校の学生と各面の人々は五千人も来場した。」（「新民歌唱大会 听众达五千人」『青島新民報』1940年7月1日）

「新民会膠州区事務分局は中満平和条約締結を祝い、且つ新民主義と新民精神の発揚、児童の人格を高めるなどの見地から、12月24日午後二時に城内進徳街新民青年会館にて新民歌演奏会を開催する……」（「膠区新民会举办新民歌演奏会」『新民日報』1940年12月27日）

上記の記事では明らかに、その目的として「新民主義と新民精神の発揚」や「児童の人格を高める」などが挙げられ、音楽会が手段として存在していたことがわかる。さらに、上記の記事では演目には『新民青年歌』『新民女性歌』などの政治的な曲目以外に、中国の伝統雅楽とイギリスの歌『春曲』（Spring Song / Frank Bridge——筆者）などのクラシック音楽も含まれていた。

また、1940年12月24日には、新民会青島市特別総会が主催した「興亜進行曲発表会¹⁹」も開催され、19の学校で合計2000人以上の学生が参加し、警察署、黄道会、東文書院の三つの楽隊が伴奏を務めた。また、初めてラジオで放送された。

以上のような新民会主催の音楽活動は、参加人数が多かったこと、新聞、ラジオなどのマスコミを手段として宣伝を行ったという特徴を持ち、その影響力は強かった。政治的に見れば、新民会の意図は音楽活動という形で日本による支配を強化することにあったが、音楽そのものの視角から見れば、多様な音楽活動の積極的な展開は、ある程度市民の文化生活を豊富にし、市民の音楽の素養を向上させることとなり、結果的に異文化交流を促進したことに繋がった側面もあった。音楽は、戦時中の人々の心を慰める機能も果たしていたといえる。

3.1.3. 教育部門主催の音楽演奏大会

当時、教育部門も積極的に各種の音楽活動を行っていた。例えば、1943年6月13日の「青島大新民報」は二面を使って、同日に青島市宣伝局と教育局が合同で開催した音楽演奏大会を報道した²⁰。このことから、政府とマスコミがこの活動を重要視していたことが分かる。プログラムは以下の通りである²¹。

表 1: 音楽演奏大会 (1943年6月13日) プログラム

No.	曲名	曲の種類	演奏形態	出演者
①	[文字が掠れて曲目は見えない] (筆者注)		合唱	全学生
②	《努力して戦争に参加する歌》	プロパガンダ曲	(未記載)	女子中学校
③	《アジアの力歌》 作詞: 不明、 作曲: 大日本興亜同盟等	プロパガンダ曲	合唱	市立中学校
④	《文行歌》		四部合唱	崇徳中学校
⑤	《海上行歌》		四部合唱	文徳中学校
⑥	《勤労増産の歌》		(未記載)	江蘇路小学校
⑦	[文字が掠れて曲目は見えない] (筆者注)		(未記載)	黄台路小学校
⑧	《青少年団結進行曲》		合奏	師範附属小学校
⑨	《海》		(未記載)	興亜路小学校
⑩	《大東亜民族団結進行曲》 作曲: 陳歌辛	プロパガンダ曲	合奏	青商
	《漢宮秋月寄生草》 明時代、楊抡《真伝正宗琴譜》	中国伝統音楽	民衆合奏	
⑪	《木蘭辞》 北宋時代、郭茂倩、 《樂譜詩集》	中国伝統音楽	(未記載)	台西路小学校
⑫	《東亜民族団結進行曲》	プロパガンダ曲	(未記載)	師範学校
⑬	《カール王進行曲》 ((König Karl Marsch) 作曲: Carl Ludwig Unrath	クラシック音楽	合奏	崇徳中学校
	《軍艦進行曲》 作詞: 鳥山啓 作曲: 瀬戸口藤吉	プロパガンダ曲		
⑭	《海行の歌》		(未記載)	北京路小学校
⑮	《ドナウ川のさざなみ》 作曲: ヨシフ・イヴァノヴィチ	クラシック音楽	三部合唱	聖功女子中学校
⑯	《花の香》 《山の色》		独唱	台東路小学校
⑰	(未記載)		ハーモニカ合奏	徳賢中学校

⑱	《万物の綺麗さ》 (ドイツ語歌) (作曲: Frühlingsglaube シューベルト——筆者注)	クラシック音楽	(未記載)	聖功女子中学校
⑲	1.《愛国行進曲》 作詞: 森川幸雄 作曲: 瀬戸口藤吉 2.《露営行進曲》 3.《軍隊行進曲》 作曲: シューベルト	プロパガンダ曲、 クラシック音楽	合奏	東文書院

上記のプログラムから、以下のような点が考察できる。

① この活動には、小学校から高校、専門学校まで、様々な年齢層、種類の学校が参加し、青島の全土におよぶ大規模な音楽活動であった。

② 独唱、合唱と合奏などがあり、演奏の編成は多様であった。

③ 曲目には、伝統音楽の《漢宮秋月寄生草》、《木蘭辞》のような中国の古曲が含まれていた。《漢宮秋月寄生草》は中国十大古曲の一つであり、古琴、琵琶、二胡などの民族楽器で演奏することが多い。《木蘭辞》は中国でよく知られている中国古代の女子木蘭が年寄りの父親に代わって従軍した物語で、歌曲版と民族器楽版がある。また、《軍隊行進曲》、《ドナウ川のさざなみ》、《カール王進行曲》、などのクラシック音楽もある。一方、政治的色彩のある曲目も含まれ、《愛国行進曲》、《アジアの力歌》、《大東亜民族団結進行曲》等のプロパガンダ曲は少なくとも四分の一を占める。このような選曲からは、政府の教育機関が主催する学校音楽活動は、プロパガンダの目的も兼ねていたことが分かる。

補足すると、《大東亜民族団結進行曲》の作曲家陳歌辛は当時上海を拠点として活躍していた音楽家であり、中国ポップ音楽の先駆者ともいえる。1940年に彼が作曲したポップソング《ROSE, ROSE, I LOVE YOU》は大ヒットとなり、1950年代に英語版もリリースされた。その英語版がアメリカでも発売され、ジャズ歌手Frankie Laineの出世作となった²²。このような音楽家がプロパガンダ曲を作曲することから当時中国での日本政権の強さと影響力が見られる。音楽はある面では、政治宣伝の手段として使われることが明白である。

上記の史料から、青島の学校音楽活動に関して、以下の点が考察できる。

① 音楽活動が豊富で、参加する学校の範囲が広い。

② 音楽活動の曲目にはクラシック音楽と伝統音楽が含まれるが、政府と教育部門が主催する音楽活動は単なる音楽教育を推し進めるためだけでなく、政治的な目的も兼ねる。これは植民時代に避けられなく、学校の音楽活動も戦時の社会状況を反映している。

3.2. 青島地元楽団による音楽活動

ドイツ植民時期から、青島には軍楽隊、オーケストラ、教会楽団、学校楽団など多数の楽団が活動していた²³。現在入手した史料によると、青島の第二次日本占領期には、「青島オーケストラ」という楽団が活躍していたことが分かる。

1941年5月27日の『大青島報』は「青島オーケストラによる二回目の演奏会は空前の盛況であった」と報道した。演奏会の会場は、

ドイツ占領期から残された蘭山路の青島市ホールであり、「二回目の演奏会」ということは、当時、青島オーケストラが創立されて間もないことを想起させる。報道によると、青島オーケストラの音楽家たちが、ベートーヴェンの交響曲第5番を含む6曲の名曲を演奏し、中国人と外国人鑑賞者の比率は1対10であった。

この報道により、青島での音楽団体の活動は戦時でも停滞していたわけではなく、継続して活躍していたことが分かる。また、中国人と外国人鑑賞者の比率(1:10)からみれば、地元の中国人鑑賞者は少数であるが、依然としてクラシック音楽を鑑賞する習慣を保っていたことが分かる。

一方、地元での音楽活動は中国人と外国人鑑賞者で構成され、同時期の上海租界では、以下の様子が記載されていた。

「劇場にかかる公演内容によって客席を占める聴衆が中国人であったり、西欧人であったり、入口にはられるポスターや看板が中国語であったり、英語であったり、公演内容が中国の演劇になったり、西洋の芸術音楽であったりという状態になった。これこそがライシャム劇場²⁴の最大の特徴であった。」(井口淳子『亡命者たちの上海楽壇』音楽之友社2019年p.21)

租界および被占領地では、公演の内容や演目によって、鑑賞者の国籍の割合が変わることは、在住者が母国の文化習慣を保つことを示し、その事実から、租界および被占領地の多文化共存の特徴が明白である。

4. 在留外国人による音楽活動

4.1. 募金を主要目的とする音楽活動

青島の在留外国人も様々な音楽活動を行っていた。その中、募金を主要目的とする活動は以下が挙げられる。

- ① ベラルーシの防共委員会²⁵のロシア人が、1939年4月に母国戦死者の遺族のために募金目的の音楽舞踏会²⁶を開催。
- ② ベラルーシの防共委員会のロシア人が、1939年6月に防共募金のために演劇舞踏会²⁷を開催
- ③ 1939年4月にロシア人の芸術家が、ロシア教会のために募金目的のロシア芸術音楽会²⁸を開催。
- ④ 1941年9月にロシア人の芸術家が、マリア幼稚園を支援するためにクラシック音楽会²⁹を開催。
- ⑤ 1941年12月にドイツ婦人会が慈善舞踏会³⁰を開催。

4.2. 在留外国人の教会による音楽活動

在留外国人の教会でも色々な音楽活動が行われ、例として以下の活動が挙げられる。

- ① 1939年12月に青島にある日本人キリスト教会、イギリス人キリスト教会、ドイツ人キリスト教会、フランス人キリスト教会が貧民救済のために慈善音楽会を開催³¹。
- ② 1940年7月にロシア人キリスト教会が、ハイカルチャーを広げるために演奏会を開催し、市民は無料で参加可能³²。
- ③ 1940年12月にキリスト教会がクリスマスを祝うために、合同で蘭山路の青島市ホールで音楽会を開催³³。

4.3. 日本と関係する音楽活動

1940年4月27日に、イタリア音楽家のドラミス教授³⁴が発起した国際音楽大会が、蘭山路の青島市ホールで開催された。音楽大会は日本軍の戦傷者を慰め、安全な生活環境を守ってくれたことに対して感謝する旨を伝える目的も兼ねていた。この音楽大会は『青島新民報』で下表の通り5回も報道された。

表2:『青島新民報』による「国際音楽大会」の関連記事

日付	記事テーマ
1940年 4月10日	「意音楽家开演奏会, 慰问伤病士兵」 (イタリア音楽家は負傷した兵士を慰問する演奏会を開催)
1940年 4月20日	「国际音乐大会昨在市礼堂试演」 (国際音楽大会は昨日市ホールでリハーサル)
1940年 4月23日	「外国音乐家发起国际音乐大会」 (外国人音楽家が国際音楽大会を発起)
1940年 4月24日	「二十七日晚八时在礼堂, 国际音乐会」 (27日夜8時に市ホールで国際音楽大会開催予定)
1940年 4月25日	「慰问日军伤兵, 国际音乐大会二十七日在市礼堂举行, 英国领事任钢琴独奏」 (負傷した日本軍を慰問する国際音楽大会は27日に市ホールで開催予定、英国領事がピアノ独奏)

このように頻繁に報道されたことから、この音楽大会は重要視されていたことが分かる。本音楽大会には、在青イギリス、アメリカ、ロシアからの音楽家が出演し、当時のイギリス在青島領事館の副領事がピアノ独奏を披露し、外国人音楽家による高水準の音楽会であったと推測できる。

日本占領期であっても、青島では、多国からの移住者が集まっている特徴に変化がなかった。支配者は変わったが、各国からの移住者はほぼ影響を受けず自分たちの生活を続けており、依然として母国の音楽伝統を保っていた。言い換えると、これは植民時期の特殊な「音楽の世界主義」(マルチカルチャー)を表していた。上述の外国人による音楽活動から、当時青島での多くのクラシック音楽活動は外国人だけではなく、全青島市民に向けた活動でもあったことが考察できる。当時の青島は日本占領期ではあったが、日本国内での洋楽受容の影響も受け、クラシック音楽の活動は引き続き盛んであった。

日本再占領期の青島における日本人主導の音楽活動、学校音楽活動及び地元楽団の音楽活動、日本人以外の在留外国人による音楽活動を分析すると、以下のことが分かる。

- ① 日本人、中国人、日本人以外の在留外国人による音楽活動には、いずれも西洋音楽が含まれているという共通性がある。
- ② 日本人、中国人、日本人以外の在留外国人による音楽活動には、いずれもプロパガンダ意図の音楽活動が含まれている。それは植民者からの政治的な影響を受けているか、または植民者が音楽活動を通して植民地での統治を確固としたものにするためであると考えられる。

5. まとめ:戦時の文化戦略と文化交流、多文化の間にみえるもの
入手できた一次史料により図1のグラフを作成した。1941年末

に勃発した太平洋戦争を境にして、1938年から1941年までを前期とし、1942年から1945年までを後期とすれば、以下のことが分かる。

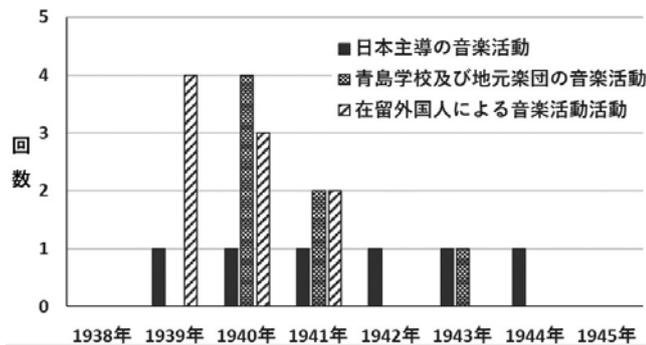
① 前期の音楽活動が多かった。特に、日本軍が設立且つコントロールする新民会による音楽活動が多く、占領期の初期段階で、植民者が占領地での影響力を広める意図が伺える。

② 前期から後期にかけて、日本主導の音楽活動が1938年と1945年以外に毎年行われ、植民者が占領地と本土との繋がりを常に重要視していることが伺える。

③ 学校及び地元楽団による音楽活動は戦時期も中断されることなく、継続的に行われていた。特に学校の音楽活動が広い範囲で行われていた。戦時期の学校音楽活動には音楽素養を向上しながら、学生に思想同化、文化浸透を図る統治者の目的があり、そこにプロパガンダ活動の目的もあった。

④ 在留外国人による音楽活動は前期が活発であり、後期には記録がなかった。その原因は、後期に在留外国人が少なかったためであると推測できる。1940年には、日本がすでに英、仏、伊などの国に中国滞在中の国民を引き揚げるように警告を発したことがあり、さらに、1941年末に太平洋戦争が勃発することによって戦局がいつそう複雑になったため、後期には在留外国人が減少したと考えられる。

図1: 1938年～1945年間の青島における音楽活動
(調査した一次史料より)



19世紀の末から第二次世界大戦終結の長い時期において、青島の支配者は幾度も変わった。1897年から1914年のドイツ占領期には、都市の建設と文化芸術の普及が推進され、特にクラシック音楽の現地における発展は著しいものであった。一方、日本占領期には思想の同化と日本文化の浸透が重要視され、その傾向は第二次日本占領期において展開された多層的な音楽活動（日本人主導の音楽活動、学校音楽活動及び地元楽団の音楽活動、日本人以外の外国人による音楽活動など）にも反映されている。特に日本音楽家による青島訪問と公演による交流は、日本の音楽を紹介する役割も担っていた。戦時という時代背景と複雑な政治的要素による制約と影響を受けていたにもかかわらず、青島の音楽活動は、結果的に中断されることなく、多彩に展開されていた。中国の伝統音楽とドイツ由来のクラシック音楽はほぼ弾圧されずに展開し、舞台と人々の生活空間に引き続き存在する結果となった。

ロビン・コーエンの『グローバル・ディアスポラ』には、以下の記述がある。

「美的感覚、一体感と親近感、気質と行動、音楽の様式、言葉の使い方、道德感、宗教的慣習、その他の様々な文化的現象がかつてないほどグローバル化し、国際的になり、クレオール化あるいはハイブリッド化してきている。」(ロビン・コーエン著 駒井洋監訳 角谷多佳子訳 『グローバル・ディアスポラ』明石書店 2001年 p.208)

青島の日本による再占領期中の音楽は、規模は限定的であるものの、このような状況のひとつと考えられ、多文化的背景と戦時期の環境の影響を受けつつ、そのグローバルな特徴と将来性を育んだともいえる。

現在の青島における音楽活動はクラシック音楽活動と中国伝統音楽活動などが共存するマルチカルチャーな特徴が顕著である。その特徴は日本による再占領期中の音楽活動との連続性を表していると推測できる。

本論文では第二次世界大戦時、日本による再占領期（1938年～1945年）中の中国青島での音楽文化の諸相とその特徴について考察したが、青島における第一次日本占領期（1914年-1922年）の音楽様相には触れなかった。日本の影響の連続性という視点から、この二回の日本占領期中の青島の音楽文化の特徴を比較して考察することを今後の課題としていきたい。

注釈

1. 羅亜蒙等 『中国歴史文化名城大辞典：上 [M]』 北京：人民日報出版社 1998年を参照。
2. 邢琪 「晚清民国时期文学生态研究 --- 以青岛为中心 (1898-1937)」 中国社会科学院研究生院博士論文 2020年6月 pp.1,14を参照。
3. 「帝国ディアスポラ」とは列強が海外に設立した植民・軍事拠点のことを指す。列強のほとんど（特にヨーロッパ国）が帝国建設の一環として自らの「インペリアル ディアスポラ」を海外に建設した。その特徴は、母国との持続的な連絡・交流とその社会制度、政治制度の参照・模倣により帝国構想の一部を担うという意識である。ロビン・コーエン著 駒井洋 監訳 角谷多佳子訳 『グローバル・ディアスポラ』 明石書店 2001年 pp.118-119を参照。
4. 楊来青 「日本二次侵占青島真相 (上)」『青島日報』 2015年6月2日 p.3 楊来青 「日本二次侵占青島真相 (下)」『青島日報』 2015年6月11日 p.3を参照。
5. 李莹 『青島民報 (1832-1937) 文艺副刊中的青島想象』 中国海洋大学修士論文 2015年5月を参照。
6. 刘格均 『试析日据台湾时期的“皇民化运动”』 首都师范大学修士論文 2007年5月28日 pp.10-14を参照。
7. 『青島新民報』は新民会青島特別市総会の機関紙であり、1938年1月に創刊された。残存記録によると、一日の最大発行部数は4万部で、当時青島で発行部数が最も多い中国語新聞紙であった。糕迎春『青島新民報研究』 中国海洋大学修士論文 2009年6月 p.10を参照。
8. 『青島大新民報』は日本による第二次占領期の後半に青島における唯一の中国語新聞紙である。1938年に日本による第二次

- 占領期に入ってから、日本人は青島におけるすべての中国人発行の新聞紙を発行停止させた。その結果、残られた中国語新聞紙は2紙のみとなり、いずれも日本人が発行またはコントロールされるものであった。一つは日本人小谷節夫が1915年に創刊した『大青島報』で、もう一つは1938年1月に新民会青島特別市総会が創刊した『青島新民報』であった。1942年に『大青島報』と『青島新民報』が合併され、『青島大新民報』となった。王磊『日本第二次占領青島期間日办中文报纸研究』山东大学修士論文 2014年5月 p.1を参照。
9. 「日华亲善音乐会，名曲如林极一时之盛」『青島大新民報』1944年9月13日。
 10. 「日陆军举行市民音乐大会」『青島新民報』1940年10月4日。
 11. 中国周代の学校での履修科目。礼節、音楽、弓術、馬車を操る技術、六書、数学の六種が含まれる。『中国历史大辞典・上巻』編集者：鄭天挺 吳澤 楊志玖 編集責任者：翁独健 蔡美彪 李学勤 上海辞書出版社 2000年による。
 12. 「于中日和调音乐中可认识同生共死」『青島大新民報』1943年3月24日。
 13. 青島市特別公署は1939年設立した日本政権の下の青島政府。高程緒「历史上的青島特別市」青島地方史志研究院公式ホームページ <http://qdsq.qingdao.gov.cn/n15752132/n20546576/n32563144/n32563150/180420155531194881.html> 2021年6月最終閲覧。
 14. 青島日本陸軍クラブは1940年に日本陸軍によって建てられ、劇場、舞台、オフィス、バー等が設けられていた。陸軍クラブは当時の日本海軍司令部と海軍クラブなどとともに占領期に日本が青島で建設した主要建築物であった。張樹楓「青島日本陸軍俱樂部旧址亟須保护」『中国文物報』2007年12月21日 p.3を参照。
 15. 治安強化運動は、第二次世界大戦中、日本が中国での占領地で統治を固めたり、未占領地に拡張したりする運動であり、1941-1942年の間に五回行われた。宋少珍「日本帝国主义在华北的“治安强化”运动」『档案天地』2002年12月号を参照。
 16. S.V.D.は神言会（カトリック教会の修道会）、Societas Verbi Diviniの略称。周丹『清末圣言会在鲁南活动考实（1879-1911）』广西师范大学修士論文 2012年4月 p.15より抜粋・引用。
 17. ドイツ人の司教の発案で1931年にアメリカウィスコンシン州聖フランシスコ教会が建てた学校である。最初は中学1年から3年まで、各学年につき1クラスで編成され、全体の学生数は78人であった。1932年9月には、高校1クラスを増設した。授業は主に英語で行われ、教科書はアメリカで出版されたもので、布教に関する内容がほとんどであった。米国籍の修道女が先生となり、学生の半数はカトリック教徒であった。卒業後、成績優秀な者は教会を通してアメリカ留学のチャンスが与えられた。同校は音楽の研究も盛んで、「貴族の学校」と言われていた。何夢影「1912—1949：青島教会学校的音乐教育」『中国音乐学（季刊）』2016年より抜粋・引用。
 18. 曾業英「略论日伪新民会」『近代史研究』1992年を参照。
 19. 「兴亚进行曲发表会 两千学生合唱 有三乐队伴奏 为本市创举」『青島新民報』1940年12月24日。
 20. 「音乐演奏大会名曲如林 精彩倍出」『青島大新民報』1943年6月13日 p.3。
 21. 「青島音乐大会今日举行」『青島大新民報』1943年6月13日 p.2。
 22. 胡凌虹「陈歌辛与陈钢·从“玫瑰”到“蝴蝶”的海派传承」『上海采风』2011年を参照。
 23. 杨雪 黄景丽 黄迎周『青島艺术史音乐卷』中国文联出版社 2017年 pp.197-202を参照。
 24. 中国で最も古い欧風劇場であり、1886年に上海在住のイギリス人により建てられた。王广西 周观武『中国近现代文学艺术辞典』郑州：中州古籍出版社 1998を参照。
 25. 1937年に日本の支援を受けて中国で設立された反共産党組織。日本当局に協力して反共産主義と親日宣伝などをしてきた。徐元宮「伪满洲国“俄奸”群体揭秘」『同舟共进』2013年を参照。
 26. 「音乐舞蹈会日前举行 - 入款寄往母国，抚恤战士遗族」『青島新民報』1939年4月20日。
 27. 「白俄防共委员会演剧舞蹈会，得款充防共基金」『青島新民報』1939年6月5日。
 28. 「俄艺术家开音乐会，修理俄国教堂」『青島新民報』1939年4月26日。
 29. 「俄音乐家举行演奏会」『青島新民報』1941年9月21日。
 30. 「德国妇人会举办慈善跳舞会」『青島新民報』1941年12月7日。
 31. 「基督教会举办慈善音乐会」『青島新民報』1939年12月23日。
 32. 「俄国教会举办音乐演奏会 市民均可参加」『青島新民報』1940年7月4日。
 33. 「基督教联合庆祝圣诞，举行音乐会」『青島新民報』1940年12月27日。
 34. イタリア国立ナポリ音楽学校を卒業後、オーストリアウィーンの音楽教授を務めた。上海オーケストラのバイオリン首席奏者、1936年に青島で音楽教授を務め、多くの青島人が彼に教わった。『青島新民報』1940年4月25日。
 35. 第二次世界大戦中に日本を中心とする枢軸国と英米を中心とする連合国が1941年12月7日から1945年8月15日までの間に行われた戦争であり、範囲は太平洋、インド洋と東アジアに及ぶ。刘世龙「日本军国主义太平洋战争」『日本学刊』2005年より抜粋・引用。
 36. 陈志刚「1940-1941年美国在华撤侨行动初探」『抗日战争研究』2015年より抜粋・引用。

参考文献

1. 刘元鸣 王家栋 王静怡『音乐之岛』中国戏剧出版社 2009年
2. 鲁海 黄默 孙英男『青島与音乐』青島出版社 2017年
3. 余敏慧「近代西洋音乐在青島的传播研究」青島大学音乐学院修士論文 2006年6月
4. 毕晓琛「20世纪上半叶青島音乐教育研究」青島大学音乐学院修士論文 2007年6月
5. 何夢影「1912—1949：青島教会学校的音乐教育」『中国音乐学』2016年
6. 王艳丽「工部局交响乐团 俄乐团舞蹈团业余俱乐部等 战时上海

- 租界音乐活动新探 (1937—1941)『中国音乐学』 2017 年
7. 汤亚汀「帝国流散,世界主义的城市空间与上海西方音乐史:日本音乐家与上海音乐协会交响乐团(1942-1945)个案研究」『音乐艺术』 2013 年
 8. 杨雪 黄景丽 黄迎周『青岛艺术史音乐卷』中国文联出版社 2017 年
 9. 傅宏远『1930 年代前期青岛的文学生态 --- 以国立青岛/山东大学为中心(1930-1937)』北京大学修士論文 2011 年 6 月
 10. 李莹『青岛民报(1832-1937)文艺副刊中的青岛想象』中国海洋大学修士論文 2015 年 5 月
 11. 邢琪『晚清民国时期文学生态研究 --- 以青岛为中心(1898-1937)』中国社会科学院研究生院博士論文 2020 年 6 月
 12. 周丹『清末圣言会在鲁南活动考实(1879-1911)』广西师范大学修士論文 2012 年 4 月
 13. 『山東文化』第三卷・第一号 青島文化連盟 1942 年
 14. 『山東文化』第五卷・第二号 青島文化連盟 1942 年
 15. 『山東文化』第四卷・第一号 青島文化連盟 1942 年
 16. 『音楽之友』第二卷・第五号 音楽之友社 1942 年
 17. 『音楽之友』第二卷・第六号 音楽之友社 1942 年
 18. 『音楽之友』第二卷・第五号 音楽之友社 1942 年
 19. 上仲尚明『膠州湾詳誌』博文館 1914 年
 20. 高橋源太郎 著者兼発行者『青島案内』 1920 年
 21. 井口淳子『亡命者たちの上海楽壇』音楽之友社 2019 年
 22. 林啓界『板東俘虜収容所』阿波文庫 南海ブックス 1978 年
 23. C. バーディック U. メースナー 林啓界『板東ドイツ人捕虜物語』海鳴社 1982 年
 24. 志村恵「ドイツ租借時代の青島における音楽活動について」『ドイツ語文化圏研究』第 13 号 日本独文学会北陸支部 2016 年
 25. 浅田進史「植民地権力と越境のポリティクス — 膠州湾租借地におけるドイツ統治を再考する」『境界研究』 2012 年
 26. ヴォルフガング・パウワー著 森宜人 柳沢のどか訳『植民都市・青島 1914-1931: 日・独・中政治経済の結節点』昭和堂 2007 年
 27. ロビン・コーエン著 駒井洋監訳 角谷多佳子訳『グローバル・ディアスポラ』明石書店 2001 年
 28. 石井文雄「孔子の音楽観」『東洋音楽研究』 1936 年
 29. 石井文雄「音楽に於ける新東洋主義」『音楽之友』 1942 年
 30. 胡凌虹「陈歌辛与陈钢・从“玫瑰”到“蝴蝶”的海派传承」『上海采风』 2011 年
 31. 小野武夫『佐藤信淵』東京潮文閣 1943 年
 32. 佐藤清勝『支那再建の現況』(出版社不明) 1941 年
 33. 刘格均「试析日据台湾时期的“皇民化运动”」首都师范大学修士論文 2007 年 5 月
 34. 陈韵「试析“皇民化”时期日本在台教育方针的转变及影响」『党史研究与教学』 2006 年
 35. 张树枫「青岛日本陆军俱乐部旧址亟须保护」『中国文物报』 2007 年 12 月 21 日
 36. 宋少珍「日本帝国主义在华北的“治安强化”运动」『档案天地』 2002 年
 37. 张艳茹「太平洋战争期间日本的战争指导大纲」『軍事歴史研究』 2016 年
 38. 程文明「从近代日本对外侵略扩张史看太平洋战争性质」『吉林师范大学学报』 2016 年
 39. 刘世龙「日本军国主义太平洋战争」『日本学刊』 2005 年
 40. 陈志刚「1940-1941 年美国在华撤侨行动初探」『抗日战争研究』 2015 年
 41. 糕迎春『青岛新民报研究』中国海洋大学修士論文 2009 年 6 月
 42. 王磊『日本第二次占领青岛期间日办中文报纸研究』山东大学修士論文 2014 年 5 月
 43. 朱子容『太平洋战争爆发』大成出版公司 1949 年
 44. George Steinmetz, Qingdao as a colony: From Apartheid to Civilizational Exchange, “Science, Technology and Modernity: Colonial Cities in Asia, 1890-1940,” Baltimore, January 16-17, 2009
 45. Qing Yu, The Development of Qingdao Piano Art in Shandong Province (1940—1966), International Seminar on Social Science and Humanities Research (SSHR 2017)
 46. Klaus R. Kunzmann, Discovering Qingdao, Planning Theory & Practice, Published online:22 Mar 2019